古典指導の在り方
―調べ学習の可能性と実践報告―

高木　智史

本稿は、平成２５年度本校高等部普通科２年生の第３学期に実施した「調べ学習」の実践報告である。近年の古典教育は従来の指導法を見直す指摘も多く、そのあり方や意義も含めて検討すべき時期にきている。その動きは聾学校においても同様であろう。そこで、古典教育全般を概観し、生徒の実態や生徒の主体的・能動的学習を軸に据えた古典教育の可能性を模索する試みとして「調べ学習」を行った。生徒が古典の世界に触れ、調べ、発表することを通して「生徒が何を考えるのか」を中心とした指導を模索した報告である。

【キーワード】　調べ学習　聾学校の古典　主体的・能動的学習　発表

1　古典教育の現状と課題

平成２０年に示された学習指導要領では、従来高等学校のみに示されていた「言語文化」への理解が小学校・中学校の『学習指導要領』にも明記され、文化としての言語や言語生活等に深い関心を持つこと、理解することが目標とされた。同時に、小学校・中学校段階から古典に親しむ態度の育成も推奨されており、この目標を達成するために古典教育がいかに重視されているかが感じられる。

しかし、平成１７年に行われた国立教育政策研究所の調査によると、子ども達の古典に対する意欲は低く、「入試に関係がなくても国語は大切である」と考える生徒が約８割いるのとは対照的に、高等学校段階における生徒の約７割が古典嫌いであるという結果が報告されている。実際に古典教育を受ける子ども達にとって古典学習は、その意義や大切さを感じる以前に、嫌悪の対象としかなっていないのである。

このような現状に対して、西辻（2011）は「古典を味わうためには、古典を理解するための基礎的・基本的な知識・技能を身に付けていなければならないことは言うまでもないが、従来その指導が先行して数多くの古典嫌いを生んできたことは否めない。」と指摘し、「古典文法を憶えないと古典は読めないという意識からの脱却が求められる。」と古典文法からの脱却、教員側の意識改革の必要性を訴えている。また、大石（2007）は古典学習の目標とすべきことは、学習指導要領を尊重しながらも「それぞれの高等学校がその目標の実現のために適切な作品を教材化すればよいと思っています。（中略）教科書の目次の順番に指導するといったような、「教科書ありき」「教材ありき」に陥ってはならない」と指摘するように、生徒に合わせた教材選択の在り方を提言している。確かに、高等学校古典教科書に採録されている作品を概観してみると、定番教材と言われる作品が多く、一部にそれぞれの教科書独自の色を出す作品は掲載されているが、全体的にはどの教科書も採録状況は酷似していると言っても過言ではない。その理由を考えてみると、現代文に関してではあるが、平田（2010）が高等学校の教科書採択は教員側に任されているために新しい指導法が必要な教材は選ばれ難いことを指摘しているのと似たようなことが大きな要因となっているのではないだろうか。つまり、ここでも教員側の意識の問題が大きく関わってきているのであり、生徒の古典嫌いを無くし、教育目標を達成す

るためには、教員側の意識そのものを変えることが先決なのではないだろうか。そして、その上で古典教育は生徒に応じた指導というものも併せて考えていく必要があると思われる。

2　聾学校における古典教育の現状と課題

聾学校における古典教育の現状は佐藤（2008）において調査を行った聾学校の大半で国語総合、特に現代文の授業に重点が置かれていると報告されている。一部の聾学校では希望者に個別対応をする学校がみられるとも指摘されているが、聾学校全体としては、現代文と比べて古典の扱いは軽いものと言わざるを得ないだろう。ただし、聾教育実践研究会（2012）の「高等部の生徒には、高等学校と同程度の教科指導が行えず、その理由については、言語力不足と世界知識の不足、さらには推論や統合、メタ認知能力といった高次認知能力の発達不全が推察され、そのことは論理的思考という後期中等教育において高めるべき能力の健聴児との差となって表れる」というような指摘や、佐藤（2011）の「聴覚障害のある子どもの言語力の育成は聾学校の使命であり」という指摘を考えると、高等部段階においてもより身近な言語活動が行いやすい現代文に偏ることも仕方がないとは思われる。無理に古典を扱い、古語や古典文法を覚えるよりは、将来により直結した分野に力を注いでいくという見方もできるだろう。

しかし一方で、このような現代文重視の傾向は特別支援学校における生徒の実態に応じているのだろうか。むしろ高等部段階に入り、生徒の実態を考えながらも、高等学校学習指導要領に準じた教育が行い、その結果、抽象的思考や論理的思考の育成が求められ、教科書も難しさを増し、現代文についていけない生徒が増えているということはないだろうか。そのようなことは「教科指導：アンケート結果」（1994）における「一斉指導の困難さ」や「指導内容が定着しない」という結果からも窺えるかと思われる。その意味では、高等部段階における現代文の扱いということは考え直すべきものであるだろうし、逆に今まで余り省みられることがなかった聾学校における古典教育も見つめ直してよいのではないだろうか。

3　「調べ学習」の有用性

本校は高等部１年次から習熟度別に生徒を上位・中位・下位の３グループに分けて、週２時間ずつ古典の授業を行っている（平成２５年度は上位８名と下位６名を担当）。近年、本校では大学進学を目指す生徒も多く、受験に必要な知識を身につけさせることも考えて、継続した古典の授業を実施している。ただし、３年次からの古典は選択制となる上、選択する生徒は例年少数（平成２４年度は３名、２５年度は４名、２６年度は１名）に止まっており、高等部全体としてみると、古典を将来的に継続して学習を続けようという生徒の意識は高いとは言えないだろう。特に、本実践を行った生徒達の多くは理系希望、一般入試志望であったため、古典はセンター試験で使用するかもしれない教科という程度の認識であったと思われる。このような生徒達に対して従来の文法指導や現代語訳の指導を約２年間行ったが、上位グループでも文法事項は用言、助動詞、敬語を一通り終えたにも関わらず、生徒の定着度を全体的に見れば、簡単な助動詞の見分けができるというレベルに止まってしまった。さらに、下位グループでは用言の識別も難しいという生徒もいた。文法が覚えられず、文法アレルギーと言っても過言ではないような生徒も多くなり、古典の本文を読むというよりも、文法の説明をするだけで古典への興味関心を失ってしまうという状態の生徒もいた。このような生徒達の状況を考えると、やはり聾学校においても従来の現代語訳や文法中心の学習は有効ではないと言えるだろう。

では、どのような指導を試みる必要があるだろうか。先の国立教育政策研究所の調査では、約半数の生徒が「人前で報告や発表などをすること」や「課題を探究してまとめて発表すること」に意義を感じているという報告があり、古典学習においても生徒の主体的・能動的活動を取り入れることが必要なのではないだろうか。さらに、先の大石の指摘や鳴島（2007）が「『古典』の時間毎に、日本人の『ものの見方、感じ方、考え方』と結びつく何かしらの発

見を与えていくことである。」と述べるように、教科書に縛られず、古典世界が生徒達の思考に繋がるような学習を行う必要があるのではないだろうか。古典の本文を読むことだけではなく、そこから何を感じ、何を考えるのかということを重視する活動が大切であろう。

そこで、そのような活動を目指した試みの１つとして、表１・表２の説明をし、生徒達に「調べ学習」を行わせた。

表１　授業計画

〈１時限目〉
授業の目的・注意事項の説明
テーマ決め・グループ分け
〈２～７時限目〉
本・インターネットを使った調べ学習
本文読解
発表資料の作成
〈８・９時限目〉
発表、質疑・応答
※下位グループは授業時間の都合上、７時間で実施。調べる時間が〈２～５時間〉となった。

表２　授業の目的・注意事項

〈授業の目的〉
①生徒自身が疑問に思ったこと、不思議に思ったことを調べ、古典世界との繋がりを感じ取り、古典学習の意義を理解する。
②指導者側に決められた本文を読むのではなく、調べ学習の過程で読解する本文を決め、目的意識を持って読む作業を行う。
③発表を通して、説明能力やコミュニケーション能力を伸長する。
〈注意事項〉
④教員は助言者に徹する。
⑤必ず古典本文や書籍に触れること。
⑥毎時間の活動内容を報告すること。
⑦発表には考察を入れること。

4　実践報告

(1) 上位グループの報告

①　１時限目

上位グループの生徒達は「調べ学習」という形態や自分達で読解する本文を決めるという作業に興味を持ち、意欲的に学習を始めることができた。しかし、きちんと調べられるかという不安を持つ生徒もいたので、指導者は困った時や分からない時の相談相手となることを伝え、安心させた上で調べ学習を開始した。

テーマ決めでは、生徒達の話合いから「怪異なもの＝物の怪」という存在について調べることに決まったが、神仏や宗教の問題、諸制度の問題などいろいろな意見が出された。本来ならば、生徒達の興味関心に合わせてそれぞれ自由なテーマを調べさせてもよかったが、次のグループ分けの関係上１つにまとめてもらった。

グループ分けでは、１つのテーマを時代毎に分けて調べることで体系的なものが見えてくるのではないだろうかと助言を行い、２名ずつの４班（Ａ～Ｄ）に分けた。そして、どの時代を調べるかを相談させ、平安が２グループ、江戸が１グループ、明治が１グループに決まった。平安は重複したので、指導者も話し合いに参加し、「物の怪そのものを調べる」班と「物の怪を調伏する存在を調べる」班でテーマを分けた。

以下、紙面の都合上、適宜他の班にも触れながら、Ａ班を中心に報告を行いたい。

②　２時限目～７時限目

聴覚障害児にとって情報を獲得する作業、とりわけこれからの時代はインターネットを使って情報をどのように取得するかということが非常に重要になってくると思われる。多種多様な情報を検索し、その中から必要な情報を見極める経験の必要性を感じ、敢えて２時限目は自由にインターネットで検索する時間を設けた。

Ａ班・Ｂ班は、「平安」「物の怪」など比較的調べ易いキーワードがあり、テーマに近い内容をスムーズに調べていた。一方で、Ｃ班、Ｄ班は「物の怪」

と検索をしても思った通りの事柄が出てこないことで戸惑っていた。しかし、C班は江戸時代になると怪談話が増加すること、D班は明治時代になると「物の怪」や「お化け」の類いから、「妖怪」に関する情報が多くなってくることを発見し、「江戸の怪談」、「妖怪や悪魔の存在」というように時代に合わせたテーマに変更したいという要望があった。

また、D班は意欲的に調べた結果、日本への西洋文化、西洋思想の流入にも注目して、調べる対象を拡げていった。しかし、それが逆に短い時間の中で調べられる容量を超えてしまい、テーマを見失うという結果に陥った。こうならないためにも指導者側で、例えば明治時代は妖怪を学問の対象として扱う時代となったというような指示を与え、事前に調べることを１つに絞らせるような工夫や注意が必要であった。

その後、A班は平安時代の物の怪を検索した結果、『源氏物語』に登場する「六条御息所」が代表的な物の怪の例として扱われていることを発見し、「六条御息所」に関する部分を読んでみたいという提案があった。そこで指導者はA班に『源氏物語』で「六条御息所」が登場する場面の説明を行った。生徒側からは特に有名な場面を本文で読んでみたいという要望があったので、能でも上演される「葵」の巻を提案し、車争いや葵を呪い殺す場面を指導者側で指定して読解することに決定した（テキストは生徒が携帯できるように　『玉上琢彌訳注源氏物語』（角川ソフィア文庫）を使用）。

また『源氏物語』は生徒だけで読解することは難しいと考え、意味のわからない箇所や内容を質問形式で説明しながら読み進めた。生徒側からは「六条御息所」が「葵」を呪い殺す理由や「光源氏」との関係などの質問があったが、厳密な語句の定義や文法の識別にこだわらなかったため嫌悪感を示すことなく読解を終えることができた。特に、生徒達が読解することに集中することができた結果、「六条御息所」の怨みの深さや生き霊となってまで現れる思いの強さに驚き、恐れるといった感想を言い合いながら読解することができた。また、今回の読解では先の「六条御息所」の説明において「六条御息所」に関する登場場面や流れの説明を行っていたため、生徒達が話の流れを予想しやすかったという面もある。実際の授業では、本文を読んでも何を言っているのかわからないという生徒も多いと思われるため、生徒が予想しやすい環境を作るということも必要な授業作りの一貫ではないだろうか。古典学習は謎解きではないのだから、教員側で読みの方向性を規定した上で読解に向かわせるという方法も考えられるだろう。読みの方策として今後も考えていきたい。

さて、『源氏物語』読解後、生徒から「六条御息所」と同様に怨みを持った「菅原道真」も調べてみたいという提案もあったが、時間の都合上、関連する文献を探すことはできず、インターネットでの調査のみになってしまい、最後は残念な結果となってしまった。しかし改めて現代は、インターネットの普及により関連する内容の検索が容易になり、生徒が興味関心を持てば自分から積極的に学ぶ素材を探すことができる時代となっていることが認識される。そして古典はそれに合ったテキストが幅広く存在する教科でもあるので、生徒に合わせて指導者側がそれをどう準備するのかが課題となるだろう。その意味では、実は聾学校における生徒に応じた、対応がし易い教科の一つと言えるのではないだろうか。

③　８時間目

１班の発表時間１０分、質疑応答５分、その後、指導者側から発表に対する感想５分という流れで行う予定だった。しかし、実際にはどの班も質疑応答が白熱し、指導者側が２５分で区切るという形になってしまった。理由としては、本校の生徒たちが討論的な活動を好む傾向があるという面もあるだろうが、それ以上に１つのテーマを時代毎に分かれて調べたことで自分の時代を基準にして物事を考えることができたため、質疑が活発になったという方が適当であるように思われる。

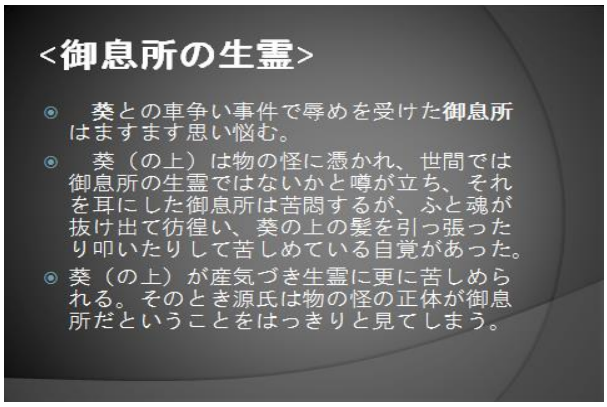

図１　発表で仕様したスライド

A班では読解した内容や調べた内容から、「生き霊」が多いという状況を考えると、「生き霊」となった人を知っている人物がいる必要があるため、「生き霊」を感じる側の問題としてまとめていた。

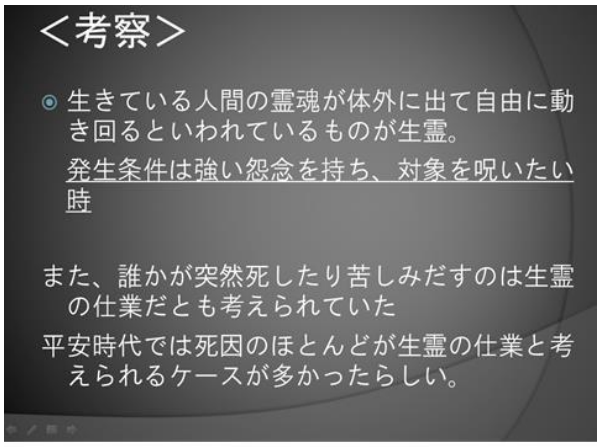

図２　発表で使用した考察（１）

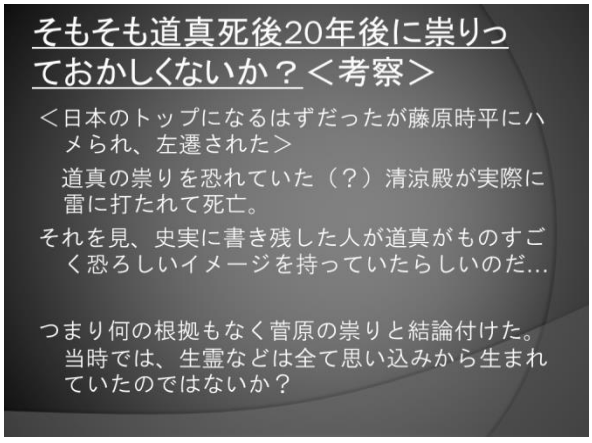

図３　発表で使用した考察（２）

表３　質疑の内容

〈質疑例〉
①科学的に証明できない以上は「物の怪」は本当にいたのではないか。
②「たたり」や「のろい」という考え方があったのに、なぜ怨まれるようなことをしたのか？
③なぜ道真は神様になることができたのか。
④明治にはいろいろな「妖怪」もいて、「物の怪」＝「悪いもの」というイメージを持っているが、善い「物の怪」はいなかったのか。

質疑の内容からは、A班の発表を受けて「怨み」の存在を肯定しながらも、そこから問題が波及している様子がわかる。これは生徒達が発表を聞くだけではなく、それを基に思考している結果であると言える。しかし、これらの質疑に対する定説はなく、水掛け論になる心配もあったが、A班だけではなく他の生徒も参加して自説を展開していた。

最後に指導者側が今までの学習も含めて感想を述べた。

表４　指導者の感想

①「もののけ」という語源を考えてみよう。
「もの」が表す意味とは何か。
②「名付け」の意味を思い出してみよう。
③天変地異を「たたり」とした人々（＝支配階級）を考え、「たたり」が果たす意味や、「神」として祭り上げることの意味を考えてみよう。

生徒達は、昔の人達がよくわからない存在を「もの」と規定したり、何か具体的に「名付け」ることで、自分達がわかる存在に変えることの意味を考え直していた。その上で、畏怖する対象が何かわかるだけで人間の恐怖や不安が少しは軽減されるのではないだろうか、そのような心の動きは現代でも同様なのではないだろうかと生徒自身の問題に敷衍した。また、B班が「陰陽師」を調べていたので、支配階級である藤原氏を想定させ、藤原氏による陰陽師の政治的利用の可能性や物の怪を調伏する陰陽師と藤原氏のつながりを問題提起し、相互に関連性を持たせた。

(2) 下位グループの報告

①　１時限目

上位グループとは異なり、「調べ学習」に対する反応は様々であった。自分達の興味関心に合わせて学習内容を決めるということに対して意欲的な姿勢を見せる生徒もいれば、調べるという行為自体を面倒くさいと感じる生徒もいた。特に後者からは与えられた課題をこなす方が楽であるという意見も聞かれたため、これからの学習は自分で調べ、学ぶ姿勢が大切であるということを説明し、「調べ学習」に取り組ませた。また、後者のような生徒を考えると、生徒にとって課題を行うことの意義も改めて考え直す必要性を感じる。与えられた課題は行うが、それに対する生徒の意欲はなく、やらされているだけという状況に陥っていることも考えられるだろう。これでは一生懸命勉強に取り組んでも、学習したことは身につかない。生徒によっては課題に向かわせる姿勢の指導というものが、求められるのであろう。

グループ分け・テーマ決めでは、上位グループと比べると、個々で活動をしたいという意見が多かった。さらに、テーマも結婚観や病気の種類や治し方、ゲームの登場人物と神話がどう影響し合うのかを調べてみたいなど、全体で統一することが難しいと感じた。そのため、１つに絞るよりは、生徒達が意欲的に取り組む姿勢を保てるように個人個人で「調べ学習」を行わせた。

②　２～５時限目

２時間目は上位グループと同様にインターネットを使って自由に検索をさせた。大半の生徒は普段から使い慣れているため、自分が調べたい内容をそのままキーワードとして入力し、関連した内容を検索していた。しかし、生徒の中にはキーワードを入力しても、そこに書かれている内容を理解することができないという生徒もおり、検索した内容を一緒に読むという作業が必要となった。一緒に読み進めると、文字は読めるが、何を言っているのかがわからないという状態がほとんどであったため、常にわかりやすいものや身近なものに例えたり、辞書を使ったりして説明をし、理解を促した。ところが、辞書を使って調べさせても、辞書の説明自体がわからないということもあり、生徒によっては、調べるという作業自体が困難なように感じた。ただし、今回のように自分の興味関心から出発した学習であれば、分からないながらも考えて前向きに取り組んでいる状況を考えると、１対１などの少数授業や取り出して指導するなどの対処は必要となるだろうが、生徒の意欲を保つ方法として「調べ学習」のような形の学習を導入してもよいのではないだろうか。

さて、他の生徒達の様子の代表として、「平安時代の結婚観」について調べたＡさんを例にとって、以下説明を行いたい。

Ａさんは、日本史において平安時代の恋愛制度を学習し、現代とは大きな差があることに興味を持ち、そこから平安時代の結婚を含む恋愛観全体を調べた。始めに、グループ全体にアンケートを取って現代の恋愛観をまとめ、それとインターネットで検索した恋愛観とを比較していた。Ａさんの身近な友達にアンケートを取る作業は、平安時代との比較を容易にするだけではなく、自分達に身近な問題として捉えるための工夫と考えられる。実際、周りの生徒達もアンケートに回答するだけではなく、お互いの恋愛観を話し合って盛り上がる場面も見受けられた。

その後、Ａさんは図４のような比較を通して、そこから平安時代と現代の結婚制度や恋愛方法までも比較するという作業に入っていった。

図４　よい妻の比較

しかし、Ａさんだけではなく、下位グループ全体

の傾向として、興味を持って調べるという活動は順調に行えたが、調べた後に古典本文とどう結び付けるかという作業は難しかった。その理由としては、時間的な制約が大きかったであろうが、それ以上に、関連する古典本文を自分で探すことが難しかったように思われる。特に、「病気の種類」や「ゲームの登場人物と神話との関係」などのテーマも含めて、調べる内容が１つの作品内に象徴的に描かれるものではなく、他作品にまたがる現象であったということが、古典本文との結び付きを見出し難かった要因であったと考えられる。今回は生徒の主体的・能動的活動を意識する余り、生徒に調べさせたが、結局は本文が見つからず、調べる時間が終わってしまったという状況を考えると、指導者の側でもっと作業をリードする必要性があったと思われる。例えば、Ａさんの場合であるならば、平安時代の女流日記や『源氏物語』などから関連する本文を指導者側で抜粋して提示する。とりわけ、恋愛の方法として「垣間見」や「恋文」などの例が出ており、『源氏物語』「若紫」冒頭や『蜻蛉日記』の恋愛始発期などの本文を参照させることで、身分制も含めた当時の恋愛観にまで深められる可能性があったと思われる。

一方、このような活動を通して調べ学習は、下位グループのように古典に対する学習が比較的苦手であると思われる生徒達に対して、意欲的に学習をさせる１つの方法ではないだろうかとも考えている。つまり、生徒達が興味関心を持って調べた内容に合わせた本文を提示することができるならば、古典本文は生徒達が調べた内容、考えた内容を確認するための手段となる。自分の思考の是非を問う場として、機能するのである。従来、指導者側から生徒達に本文を提示する際には、「何のために本文を読むのか」が曖昧なために、生徒達は学習に疑問を持つ生徒も多かったと思われるが、このようなやり方で本文を示せれば、目的意識を持って生徒達が本文に取り組める姿勢が作れるであろう。また、本文読解を通して自分が考えていたことと異なる現象に出会うならば、その差異から、生徒達の思考や知識もより深まりを見せると思われる。その意味では、古典に苦手意識が強い下位グループのような生徒達にこそ、目的意識を明確化させた上で本文に取り組ませる姿勢作りが大切であり、指導者側はそれを補助するべきであろう。

③　６時間目

上位グループと同様の流れで発表、質疑・応答を行った。発表では必ず考察を入れるように求めたが、「現代と似ている点や異なる点がわかった」という意見や、「調べてみるといろいろと知らないことがわかって面白かった」など、考察というよりは感想に近いものが多かった。また発表自体はわかりやすいものが多かったが、やはり古典本文に触れられなかったため奥深さが出ず、表面的な説明に終始していた。そのため質疑応答でも、恋愛や結婚が孕む問題などに行き着くことなく、自己の興味の範囲内での質疑（表４）に終始していたと思われる。

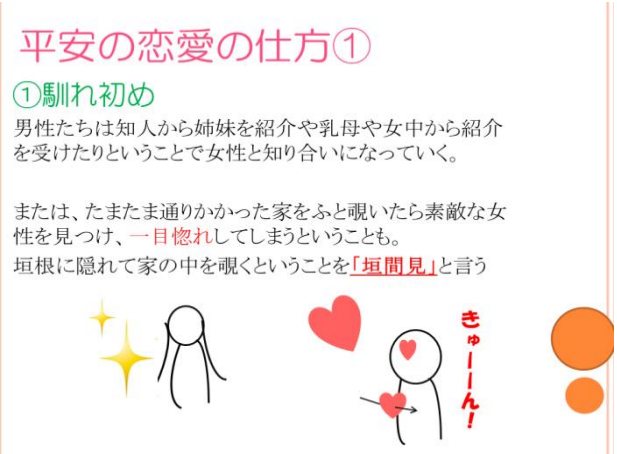

図５　発表で使用したスライド

表４　質疑例

①平安時代の男性は女性のところに通って行った後に何をするのか。
②嫌いな人からの恋愛はどのように対応するのか。
③当時の女性の容貌はどのような感じか。
④一夫多妻制と一夫一婦制はどちらがよいと思うか。
⑤他の恋愛形態はなかったのか。

また、質疑①や⑤は教育的配慮を要する説明に傾く可能性もあったので、指導者が適宜説明に加わり、当時の女性が置かれた苦悩や社会的身分などの話

を付け加え、現代との違いを考えさせた。

しかし一方で、下位グループのように古典を苦手とする生徒が多くいる場合でも、自分の興味関心のある事象を調べることに対しては抵抗感が生まれなかったことは改めて着目するべきであろう。文法や訳を意識する古典ではなく、現象に着目し、その内実を学習していく古典の在り方は、学力を問わず、生徒に受け入れられる可能性があるのではないだろうか。特に聾学校のように、生徒の個人差が大きく一斉授業が困難な場合には効果的な学習方法という側面もあると思われる。

5　反省と課題

さて、今回の試みは、生徒達の主体的・能動的活動を軸に学習を進めることで、古典学習を改めて見つめ直す契機とした。子ども達の古典嫌いが叫ばれる今日、生徒達が古典世界と関わる１方法として「調べ学習」は有効な、示唆的な面もあったと思われる。

しかし、実施に当たっては、１つの事象を調べるだけでも相当な時間がかかること、読解した古典本文をどのように共有するかということ、どのように評価を行うのかなど課題も多い。特に、言語を通した教育が求められる国語教育において、本文の扱いは重視すべき問題であるだろう。今後も模索していきたい。

〔参考文献〕

文部科学省（2008）小学校学習指導要領，中学校学習指導要領。

文部科学省（2009）高等学校学習指導要領，特別支援学校高等部学習指導要領。

国立教育政策研究所（2005）平成１７年度高等学校教育課程実施状況調査。

国立特別支援教育総合研究所（2011）聴覚障害教育．高等部段階における指導の工夫。

大石健一（2007）高等学校国語教育における古典。日本語学,26(2)，48-54。

教科指導：アンケート結果（1994）聴覚障害。（６），4-16。

佐藤正幸（2008）聾学校高等部から大学基礎教育課程への移行に関する調査研究。筑波技術大学テクノレポート,15，145―148。

佐藤文昭（2011）聴覚障害児の生活に生かした読解力の向上を目指した取組について―ＰＩＳＡ型読解力の育成の視点から―。聴覚障害。（４），4-11。

鳴島甫（2007）：高等学校国語教育における古典。日本語学,26(2)，6-12。

西辻正副（2011）高等学校国語における古典の指導の新しい展開。日本語学，３０（２），28－36。

平田知之（2010）「引き出す力」を評価したい。日本語学,29(13)，68-76。

聾教育実践研究会編（2012）はじめの一歩―聾学校の授業―。聾教育研究会。